



芹沢銈介装丁
「写真集 四国のおもちゃ」

終生蒲田を愛した人間国宝、

芹沢銈介（型絵染保持者）

とのなつかしい日々

〜愛弟子兵頭みどりさんに聞く〜

高橋 明紀代・新倉 太郎

蒲田在住の染色家、芹沢銈介が設立した芹沢染紙研究所で学び、芹沢の仕事も手伝い、その晩年をみおくれた兵頭さんに、芹沢先生の思い出や印象深いエピソードを語っていただきました。

●念願の芹沢染紙研究所に入所を許可される

兵頭さんは、愛媛県宇和島市の出身で、幼稚園の教師をしていたが、退職して、染の技法を学ぼうと考え上京し、知人の紹介で大森山王の久保田すみ子染色教室で内弟子として学んだ。

一九七六（昭和五一）年芹沢染紙研究所（以下芹研）を訪れて入所したいと申し出た。その時、芹沢先生は鳴子温泉に逗留中でお留守でした。事務長の杉原さんに染物の経験はあるが「型染」をしたいという私の希望を聴いていただいた。数日後、芹沢先生が戻られ、ご挨拶にうかがい、型染を学び

たいのでよろしくお願いしますと話しました。芹沢先生は穏やかな眼差しで、「二月にフランスの国立グラン・パレ美術館で展覧会をするのでいろいろ手伝って欲しい。」といわれました。私が幼稚園に勤務していたことを履歴書で把握されていて、「愛媛の子どもらはどんなおもちゃで遊んでいるのかね。」とたずねられました。後日、わかるのですが、この時先生は写真集（四国のおもちゃ）の装丁を依頼され、制作中だったので。

芹研へ四月一日入所が許可されました。芹研には二十数名の所員がいてカレンダー、カード、はがき、うちわ、扇子等を分担して、染めあげていました。私は見習い助手としてだけでなく、事務、雑事を引受けました。当時芹研はコピー機もなかった。カラーコピーは羽田の開明社へいたり、市川市の八田藍染屋さんへ出向いたり、郵便局や銀行まわりと大いそがしでしたが、とても充実した日々でした。

家にかえってから「どんなおもちゃといわれても・・・。」あれこれ宇和島の郷土玩具、土産品、祭の写真、遊び方を絵をかいて、三日後くらいに相談方々、先に杉原さんにみせる、「いつ言われたの？」と。「あいさつにいった時です」と言うとうとびっくりして「とにかく早くもっていきなさい」とおろされました。

先生にいわれたことは何をおいても、即実行が慣例だと聞かされて、私がおそろおそろお見せすると、先生は案のじょう不機嫌気味に「もう、おわったよ。愛媛は媛たるまにした



誕生パーティーでまといを振つてもてなす芹沢銈介とたよ夫人

よ」と絵を見せてくださいました。私は持ち込んだものを片付けて持ち帰ろうとしたら、先生はうなずきながら「まあ、おいていきなさい」と言われました。

ついに（「四国のおもちや」）上梓じょうし。なんとなんと、愛媛の

扉には、宇和島地方の祭礼の山車だしで、私の描いた牛鬼の絵柄が染められていました。先生にサインをしていただき、その装丁本をいただきました。私の宝物です。先生は誠意をもつて取り組むと、暖かく応えてくださいました。

●にぎやかだった先生の誕生パーティー

一月のグラン・パレ展に向けて芹研は忙しさを増していった。この年の先生の誕生パーティーは、パレ展を控えていたので、外部のお客様も招待することになりました。先生は所員に招待状、メニュー、看板、ポスターを作るように言われました。

パーティーに並べるごちそうは、奥様の芹沢たよ様（以下奥様）や所員で、手作りしました。OBたちも駆けつけて仙台出身者は郷土名物「ずんだもち」を作り、富山出身者は八尾の「おわら 風の盆」を踊りました。

庭に炉ばた焼の模擬店巴里屋を出して、所員が焼きながらお客様にサービスをしました。先生のアイデアで、所員は強製紙に型染して作った前だけの半てんを着たのです。大勢

のお客様がおいでになり、たいへんにぎやかで盛りあがったパーティーでした。毎年先生の誕生日である五月二三日は、不思議に好天に恵まりました。誕生パーティーは、先生がお元気で迎えられた満八八才の米寿もお祝いしました。

●グラン・パレ展の展示準備そして現地の成功を体験。「風」の字のポスターが巴里の空に

一月のグラン・パレ展に向けて展示会場の天井の高さを実寸で庭に布を張り、作品陳列テストを何度も繰り返しました。また、縮尺のひな形で屏風や着物、のれんなどを作りました。先生はとても厳しくて、納得いかない時はやり直しを指示されました。

記録写真をみると、実際の展覽会場と見まごう程の出来ばえでした。グラン・パレ展は現地の評判は非常に高く大成功でした。私もパレ展に参加させていただきましたので、そのことを肌で感じる事が出来ました。

芹沢先生は世界のSERIZAWAとして、より知られることになったと思います。

●赤坂サントリー美術館で、凱旋帰朝展一九七七（昭和五二）年に開催

赤坂サントリー美術館で「芹沢銈介展」が大々的に開催され、大好評でした。館始まって以来の最高観客数だった・・・と。芹沢には国内や海外からの見学者も大勢おみえになりました。



誕生パーティーで
芹沢銈介(右)とたよ夫人→

←誕生パーティーで薦被りの
樽酒を汲む芹沢銈介とたよ
夫人



した。先生は最高のおもてなしを志こころされるあまり、所員たちは緊張の連続でした。

●晩年の芹沢先生をみまもり、ついに幕がおろされることに一九八二(昭和五七)年先生の八七才の誕生日は、米寿の前祝い会とすることになりました。先生の提案で参加者が「豆しぼり」の手ぬぐいを身につけました。先生は奥様とにこやかにこもかぶりの樽酒で鏡開き、もちつきをされ、コレクションの外国の民族衣裳を着たり、装身具をつけたり、日本の古典的鶴舞紋の祝着をまとい、笑顔でお客様と歓談されていきました。

パーティーでは、地元の商店主たちがみえて、模擬店の準備をしてくださいました。魚亀さんは寿司屋を、焼き鳥の五番亭さんは家族総出で手伝ってくださいました。シミズデンキさんは提灯や照明、カタギリフォートさん、OMスタジオさんは記念写真を撮っていただきました。所員は一丸となって登呂コーヒーショップや芹沢カレー、女塚おでん屋等を出しておもてなしをしました。また、ある所員は手作りの纏まとを威勢よく振って披露しました。ファイナルは、お客様もフォークダンスに加わって、最後は先生もその環の中に入って踊られ、パーティーは最高潮に!!

けれども、思いがけぬことですが、翌一九八三(昭和五八)年四月十九日、突然奥様が亡くなられ、先生はとてもお氣落

ちの折り、八月一九日自宅で倒れられ、虎の門病院へ入院されました。

一時は快方に向かわれたのですが、翌一九八四(昭和五九)年四月五日亡くなられました。

私は短い期間でしたが、先生の集大成の時代をお傍で過ごし、たいへん貴重な体験をさせていただきました。パリ展オープン直前の慌ただしい時、文化功労賞受章のしらせが届きました。先生は私に「君は幸運を運んでくれたよ。」と照れながらおっしゃいました。

先生はとても厳しい面もありましたが。。。このゆがみが実におもしろいよ。ボクの作品をよくみてくれてるね。シヤガール調だね。」とポツリ。そんな批評の言葉が嬉しくて、私たちは一生懸命作品づくりに夢中になったと思います。

「まねして、おいこせ」という先生の深い言葉の直筆額が教室にかかっていました。

ある時奥様が「柳宗悦先生が亡くなってから、先生はせっかちになった」とおっしゃいました。柳先生の死後、先生は民芸のリーダーとしての使命感や責任を強く意識されるようになったのでしょうか。

一九八六(昭和六一)年三月三十一日芹研はのれんを降ろしました。

NHK連続テレビ小説「梅ちゃん先生」のタイトルバックには芹沢のすぐ横、呑川にかかる馬引橋から六郷の花火・電

車がみえます。「この辺りだわね」と、仙台在住の芹沢恵子さん（御長男長介氏夫人）、伊藤京さん（初孫娘）、地元に帰っているOBたちと話したことでした。

先生と奥様もきつとあちらからみていらつしやったと思います。今岡規恵さん（御長女）と芹沢に住み、先生、奥様を偲びながら……。

月日は流れ、今岡規恵さんも一九九七（平成九）年に亡くなられ、一九九九（平成一一）年五月「芹沢邸」は私にとって「永遠の浄土」となったのです。

私は全てを見送り、今も元芹沢邸の隣に住んでいます。

「ようこそね。蒲田モダン研究会さんが「芹沢」のことを聞きたいと言ってくれるのかね。」と芹沢先生のお気遣いのお言葉が聞こえてきそうです。

「蒲田モダン研究会」で記念誌の発行が決まり、「芹沢」のことを載せる企画をいただきました。芹研一の幸福者だったと自負する私は、芹沢についてお話をすることになりました。私の尽きぬ想い出語りに、紙面を与えていただき、とてもうれしく感謝でいっぱいです。

ようこそ。ご多忙の中、おつきあい下さいました高橋様、新倉様ありがとうございました。

（取材：二〇一九年四月一三日）



にぎやかな芹沢銈介の誕生パーティーで全員集合